

ジョン・A・マクドナルド生誕200周年をめぐって：
評価の分裂、そしてナショナル・ヒストリーの限界と可能性

田中 俊弘（麗澤大学）

はじめに

カナダは今、様々な意味で歴史的な節目を迎えており、過去を振り返る重要な時期に差し掛かっている。たとえば、2012年には、1812年戦争の200周年を記念して国内で各種の行事が開催された。そして今から2年後には、連邦結成150周年を迎える。今年2015年は、カナダ国旗制定50周年でもあり、このセッションのテーマである初代首相マクドナルドの生誕200周年でもある。それを祝う準備のコミッティー（Sir John A. Macdonald Bicentennial Commission）は、2010年に組織され、準備を進めてきた¹。そして、今年に入ると、周年を祝う行事が、初代首相の郷里であるキングストンをはじめカナダの各地で、数多く開催されている。

スティーヴン・ハーパー（Stephen Harper）首相は、保守党の偉大なる先任者を讃えて演説し、キングストンで記念切手や記念コインの発表行事にも参加した²。そのキングストンでは、元オンタリオ州首相ボブ・レイ（Bob Rae）らを招いた討論会や花火大会などが行われた他、マクドナルドの誕生日である1月11日を中心に、非営利演劇団体が「マクドナルド週間」と銘打って演劇祭を開催した³。これらの一連の祝祭行事の中には、学術的に重要な文献の出版も含まれる⁴。

本報告は、そうした記念碑的な歴史研究書も参照しながら、「現代から見たマクドナルド」を主題とする。初代首相をカナダがどのように扱ってきたのか、という「歴史と記憶」に関する代表的な研究として、イヴ・ペルチエ（Ives Y. Pelletier）の2010年の博士論文（“The Old Chieftain’s New Image: Shaping the Public Memory of Sir John A. Macdonald in Ontario and Quebec, 1891-1967”）があり、他にも様々な文献から断片的に見えてくることがある。それらを踏まえて、マクドナルドの評価の変遷について触れた後、今年の節目の年に、彼をめぐって、カナダでどのような議論が起きているかを提示するのが、本報告の主眼となる。そして、そうした現代の議論を踏まえて、ナショナル・ヒストリーの難しさや限界について論じていくこととする。

その前に、マクドナルドの人物像や彼が果たした役割についても、触れておく必要があ

¹ キングストンの弁護士ロバート・チェガス（Robert P. Tchegus）を代表とする組織。保守党と自由党の両党からキム・キャンベル（Kim Campbell）、ジャン・クレティエン（Jean Chrétien）、ジョー・クラーク（Joe Clark）、ポール・マーティン（Paul Martin）、ブライアン・マルルーニ（Brian Mulroney）、ジョン・ターナー（John Turner）元首相が名誉理事として名を連ね、超党派的特徴を強調している。

² この演説の一部は後ほど引用する。ハーパーは、初代首相生誕200周年の祝祭に400万ドルの予算を計上したが、一部の自由党議員からは、自由党政権時代の記念碑的出来事である国旗制定50周年に50万ドルしか計上していないのと比較して、批判の声も出ている。ちなみに、1812年戦争200周年には520万ドルが計上された。また、今年、ハーパー政権はウクライナのホロドモール（Horodomor、1932-33年の人工的飢饉）への意識を喚起するために150万ドルを拠出する。“How Harper parties the partisan way,” *Maclean’s*, Feb. 20, 2015 <<http://www.macleans.ca/politics/how-harper-parties-the-partisan-way/>>; “Feds to spend \$50,000 for flag’s 50th birthday celebration,” CBC site, Jan. 15, 2015 <<http://www.cbc.ca/m/touch/politics/story/1.2906890>>

³ Sir John A. 2015 <www.sirjohna2015.ca/>; “Events Mark Sir John A. Macdonald Bicentennial,” City of Kingston site <<https://www.cityofkingston.ca/-/events-mark-sir-john-a-macdonald-bicentennial>>

⁴ Sarah Katherine Gibson & Arthur Milnes eds., *Canada Transformed: The Speeches of Sir John A. Macdonald—A Bicentennial Celebration*, Toronto: McClelland & Stewart, 2014; Patrice Dutil & Roger Hall eds., *Macdonald at 200: New Reflections and Legacies*, Toronto: Dundurn, 2014.

るだろう。日本では、外国史を伝記的なアプローチから研究する文化が欠落しており、マクドナルドについても、実は日本語ではほとんど説明されてこなかった。時間的制約もあり、また報告者の力量の問題もあって詳述はできないが、彼の足跡とカナダへの貢献を説明しておきたい。

1. ジョン・A・マクドナルドの足跡とカナダへの貢献

連邦結成期の英語系の政治家には珍しくないが、マクドナルドは、英国で生まれた移民の子供である。1815年にスコットランドのグラスゴーで生まれたジョン少年は、父親の仕事の失敗で、両親に連れられて移住してきた⁵。

その後、キングストンで開業して若き有能な弁護士としての名声を得た彼は、1843年に出馬して初当選を果たした。英語系住民が圧倒的多数派を占めるアップーカナダ植民地（現オンタリオ州の一部）と仏語系住民が圧倒的多数派のローワーカナダ植民地（現ケベック州の一部）が合同して、連合カナダ植民地が誕生した2年後である。以後、彼はキングストンを地盤として当選を重ねた。

保守党に所属した彼は、君主制を賞賛し、英国との紐帯維持を期待する保守穏健派であり、アメリカ合衆国に対しては脅威論を唱えていた⁶。同じアップーカナダでも、フランス系を激しく批判して人口比例代議制（Rep by Pop: Representation by Population）を主張する改革派のジョージ・ブラウン（George Brown）らとは大いに異なる立場を取った⁷。マクドナルドは、最初の妻イザベラ（Isabella）の長く重い病もあって、議会の欠席も多かったし⁸、おそらくそのような家庭環境や父親からの遺伝も手伝って、飲酒に耽溺する様子を揶揄され続けたが⁹、それでも、政界での存在感を徐々に増していく。1850年代までには、彼は英系保守派を代表する政治家の1人となった。1847年に歳入役を務めた後、司法長官などの閣僚経験を経て、1856年には、共同首相に就任している。

この頃、連合カナダ植民地の政治的混乱が強まっていた。同植民地が成立してから連邦結成を迎えるまでの26年間に、実に18もの内閣が成立と崩壊を繰り返し、重要法案さえ審議できない状況であったし、そもそも植民地首都さえ1ヶ所に定められず、トロントとモントリオールの間を交互する有様であった¹⁰。他方、アメリカ合衆国では南北戦争が勃発し、イギリスが南部を支持したために、カナダは北軍の攻撃対象となる恐れが生じていた。そこに英領北米植民地間鉄道建設のアイディアが絡み、連邦結成による解決案が浮上してきた。より大きな植民地となって、連合カナダ内の対立を周縁化するとともに、アメリカからの脅威に対抗しようという方策である。連合カナダ内では、改革派のブラウンが不倶戴天の敵だったマクドナルドとの大同団結に踏み切ったのが重要な一歩となった¹¹。

⁵ 歴史家ジェド・マーティン（Ged Martin）は、別の親戚のついででジョージアに移住する可能性があったと紹介して、「ジョン・Aは、カナダの連邦結成の父祖となる代わりに、アメリカ合衆国の南北戦争で南部連合に従軍して奴隷制を守るべく戦った可能性もあった」と、歴史の偶然性に触れている。Ged Martin, *John A. Macdonald: Canada's First Prime Minister* (Toronto: Dundurn, 2013), 19.

⁶ J.L. Granatstein and Norman Hillmer, *Prime Ministers: Ranking Canada's Leaders*, (Toronto: A Phyllis Bruce book, 1999) 17-18.

⁷ 木村和男『連邦結成—カナダの試練』（日本放送出版協会、1991年）、37-38頁。

⁸ 体調を崩した妻のために、彼は1844年にはアメリカ合衆国コネチカットのニュー・ヘイヴンへ、そしてさらにジョージアのサヴァンナへ彼女を静養のために連れていった。イザベラはその後長く合衆国に留まった。Patricia Phenix, *Private Demons: The Tragic Personal Life of John A. Macdonald* (Toronto: McClelland & Stewart, 2006), 64-65.

⁹ Ibid., 107; Martin, *John A. Macdonald*, 26-27.

¹⁰ 木村『連邦結成』、40-42頁。

¹¹ 同上、57-60頁；細川道久は、外因を過大評価する連邦結成史観を批判し、「英米の圧力から連邦結成が促進されたというのは一面でしかなく、連合カナダ植民地内部の内発的・自律的な連邦結成運動の側面も見

1864年8月末、カナダ東部の沿海植民地での同盟交渉が開催される予定だったが、そこに連合カナダの代表として、マクドナルドやブラウンらが乗り込み、大同団結の重要性を説いて実現に至ったのが連邦結成であった。プリンス・エドワード島植民地の連邦参加は遅れ、オンタリオ、ケベック、ニュー・ブランズウィック、ノヴァ・スコシアの4州のみからの門出だったとはいえ、英領北アメリカ法を憲法とする、新しい自治領が1867年7月に生成したのである。

この功績でマクドナルドは叙勲し、総督から初代首相に任命された。彼はその後、この統治の難しい国の舵を取り、一旦は大陸横断鉄道敷設をめぐる収賄疑惑（パシフィック・スキャンダル）で政権を追われるも、その後再び首相に返り咲き、亡くなるその日まで計19年間その役割を果たした。この初代・第3代首相の下で、カナダは未曾有の発展を遂げた。ハドソン湾会社領土（ルパーツランド）を購入し、西部に版図を大きく拡大したのも、ブリティッシュ・コロンビア植民地を連邦に加えたのも、大陸国家を鉄道で結んだのも、すべてマクドナルド政権で実現した出来事であった¹²。選挙に勝って多数派政権を6度も組閣したのは、カナダ史上で彼だけである。

「自分の良心に反する、それが間違っているとわかっている行動を取ることはしばしばであった¹³」という自身の発言もあり、実践的で柔軟な政治姿勢が評価も批判もされるマクドナルドだが、決して日和見的な政治家ではなかった。政治信条や自ら思い描くカナダの将来像には忠実だったし、連邦結成に心底から重要性を見出していた。そして、本来は決して改革志向の政治家ではなかった。実際、彼が最後に当選した1891年選挙では、「古い旗、古い政策、古いリーダー（The Old Flag, the Old Policy, the Old Leader）」が保守党のスローガンとなり、さらに彼は、「英国人として生まれ、英国人として死ぬ（A British subject I was born—a British subject I will die.）」という有名な発言をしている¹⁴。興味深いことに、カナダは、そのような保守的な指導者を中心に連邦結成という大変革を成し遂げ、大陸横断国家へと版図を拡大させたのである。

歴史作家リチャード・グウィン（Richard Gwyn）の伝記のタイトルのとおり、彼はまさに「国家を作った男（Nation Maker）」であった。政治外交史家のジャック・グラナッスティン（Jack Granatstein）とノーマン・ヒルマー（Norman Hillmer）も、「間違いなく、マクドナルドはこの国でもっとも偉大な指導者の1人」だと断じた上で、「彼は、カナダがそれを必要としていた時の天才的指導者だった」と、その重要性を強調する¹⁵。そして次のようにまとめている。

大長老（The Grand Old Man）と人々は彼を呼ぶ。そしてサー・ジョン・A・マクドナルドは、カナダ首相の雛形を作ったのである。地域、宗教、階級、そして職業間の差異のバランスを取ったマクドナルドは、この御し難い国を統治する方法を本能的に理解していた。意志の力と国家的な視野の強さによって、彼はそれを機能させた。そして、一時の間、どれほど有能なトリックマスターに自分たちが導かれていたのかをカナダ人は忘れていたのだ¹⁶。

落とすべきではない」と論じて、ブラウンの改革派内の変化を丁寧に描きだしている。細川道久『カナダの自立と北大西洋世界：英米関係と民族問題』（刀水書房、2014年）、第2章（引用は65頁）。

¹² 大原祐子は、職業別の利害を超えて農民と製造工業者の協調による産業保護を唱え、それをナショナル・ポリシーの柱にした点で、マクドナルドの功績が大きかったと論じている。大原「カナダにおける『ナショナル・ポリシー』の決定とジョン・A・マクドナルド」『史苑』112号、1973年、22頁。

¹³ Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 23.

¹⁴ Gwyn, *Nation Maker—Sir John A. Macdonald: His Life, Our Times, Vol. 2-1867-1891* (Toronto: Random House Canada, 2012), 563-64.

¹⁵ Granatstein and Hillmer, *Prime Ministers*, 27-28.

¹⁶ *Ibid.*, 15.

カナダ初代首相は、この国の統治形態のマスタープランを作り出した人物であった。

2. マクドナルドの評価の変遷

1891年6月6日、マクドナルドは首相在任中に息を引き取った。政敵だったローリエは、マクドナルドの死を追悼して、次のように述べている。

彼を失って、私たちは参っている。私自身も、彼を失って参っている。この議会も同様だ。まるで本当にこの地の制度の1つが崩れ落ちたかのようだ。サー・ジョン・A・マクドナルドは、今や歴史的な存在となり、間違いなく、今閉じられたばかりのそのキャリアは、今世紀でもっとも顕著なものである¹⁷。

政党も政治手法も異なる、そして時に激しく対立したライバルから、このような賛辞を得たマクドナルドは、間違いなくカナダで最も重要な政治家の1人であった。盛大な国葬で、何千もの国民が彼を見送り、遺体をオタワからキングストンに移すために汽車 (funeral train) が用意された。そして彼の死後4年間のうちに、計4体の像が各地に建立された(ハミルトン、オタワ、モントリオール、キングストン)。それらは初代首相を讃えるに相応しいイベントであった。

しかし、マクドナルドがカナダ全国民のシンボルとなる道は、決して平坦ではなかった。イヴ・ペルチエは、その博士論文で、マクドナルドの「公的記憶」が変遷する過程を論じている。死後間もなく、彼は連邦結成の父祖の中でも特別な存在として扱われるようになったとはいえ、保守党が打ち出した「民族や宗教の橋渡し役」というイメージは、ローリエ自由党やケベックから無視された。また、自由党はマクドナルドのナショナル・ポリシーに対しても否定的な立場を採った。この時代、マクドナルドは保守党内の神話のみで重視される存在だったのである。

マッケンジー・キング (W.L.M. King) 自由党政権では、連邦結成 60 周年 (ダイヤモンド・ジュビリー) とマクドナルド没後 50 周年を祝う機会があった。キングは、1927 年の前者では、保守党を意識して、マクドナルドだけではなく連邦結成の父祖たち全員にスポットを当てようと骨を折り、しかし第二次世界大戦中の 1941 年の後者では、国全体をまとめるシンボルを求めて、初代首相を讃えた。キングは、ケベックにおける「副官」だったエルネスト・ラポイント (Ernest Lapointe) を利用して、フランス系の間にも、国家統合の象徴としてのマクドナルドのイメージを提示することに成功したのである。

戦後、1960 年代には、没後 70 周年の記念銘板の除幕式 (アーンスクリフ) (1961 年)、政府によるベルビュー・ハウス (キングストン) 購入 (1964 年)、マクドナルド没後 150 周年 (1865 年)、そして連邦結成 100 周年 (1967 年) の諸行事を経て、マクドナルドの父祖としての評価はさらに高まった。保守党のジョン・ディーフェンベーカー (John G. Diefenbaker) も自由党のレスター・ピアソン (Lester B. Pearson) も、マクドナルドを国家統合のシンボルとみなした。しかし、ケベックのナショナリズムが高まる時代だったこともあり、政治の場でもメディアでの取り上げられ方も、オンタリオ中心、キングストン中心の評価だったと、ペルチエは指摘している¹⁸。

結局、初期の党派対立と後の州間・地域間の対立によって、マクドナルドは十分に「英

¹⁷ ローリエが議会で行なった追悼演説。Quoted in “Time to Honor Our National Hero,” *The Globe and Mail*, January 12, 2002.

<<http://www.theglobeandmail.com/globe-debate/time-to-honour-a-national-hero/article752460/>>

¹⁸ Ives Y. Pelletier, “The Old Chieftain’s New Image,” 224.

雄化」できなかったのかもしれない。2001年に加米両国で実施された調査によると、初代大統領がジョージ・ワシントンと答えられたアメリカ人が90%だったのに対して、初代首相がマクドナルドと知っていたカナダ人は54%にすぎなかった¹⁹。なお、このカナダ側の数値はその後さらに低下し、2015年1月の調査で正答できたのは26%にすぎなかった²⁰。CBCのアンカーで、作家、そして事業家でもあるドミニオン・インスティテュートの創始者ラドヤード・グリフィス (Rudyard Griffiths) は、「カナダ人はこの結果に注意を払うべきである。国家アイデンティティの強さは、事実に関する知識を共通の素地とする市民に基づくことを示すもう1つの事例をもたらしている。グローバリゼーションが進み価値観が変化する世界で、カナダはアメリカの事例に注意を向けるべきなのだ」と警鐘を鳴らした²¹。この種の嘆きには、他にも多くの政治家や活動家、そして歴史家が共鳴した。たとえば、ジョン・ターナー元首相は次のように述べている。

...国家の英雄をこれほど無視している国は、他にほとんどない。マクドナルドをワシントンと比べた場合、アメリカ合衆国の特徴を決める上で、後者が果たした役割に対して、サー・ジョンは、カナダという国を作り上げる際に、より大きな役割を果たしたとって問題あるまい。しかも、マクドナルドは、より興味深い個性の持ち主なのだ。皮肉なことに、マクドナルドのパーソナリティの興味深さゆえに、彼の真の偉大さが曖昧になってしまったのだ²²。

そもそも、アメリカの大統領は、政治家として活躍する期間が、はるかに限定的である。それにもかかわらず、初代大統領の名前はその首都や州名に使われた他、いくつかの大学名になり、いくつもの小中高校の名前にもなり、誕生日は、1879年には祝日になっている。首都には巨大なモニュメントもある。他方、マクドナルドの誕生日がようやく2002年に祝日になって以降も²³、その日が大々的に喧伝されることはほとんどない。また、学校名では、いくつかの中学校や高校にその名前が冠されるのみである²⁴。マクドナルド＝カルチェ国際空港やマクドナルド＝カルチェ高速道路は、それぞれオタワ空港や401号線という旧来の呼称が一般的である²⁵。国民によるマクドナルドの認知度の低さは、カナダが初代首相を英雄として取り上げてこなかったからだとしてターナーは考えたのである。

¹⁹ “Survey: Canadians less aware of history than Americans,” *The Southeast Missourian*, July 1, 2001. カナダ人の歴史関心喚起を目指す非営利団体ドミニオン・インスティテュート (現 *Historica Canada*) とリサーチ会社イプソス (Ipsos) が両国で約1000名を対象に実施したアンケート。

²⁰ ヒストリカ・カナダの依頼を受けてイプソスが行ったアンケート調査の結果。連邦結成の年について答えられたのも28%にすぎない。なお、これは、1001人のインタビュー結果に基づき、人口構成など諸要素を鑑みて計算した結果である。<<http://www.ipsos-na.com/news-polls/pressrelease.aspx?id=6617>>; アメリカについては2001年の情報。次の記事を参照。“Survey: Canadians less aware of history than Americans,” *The Southeast Missourian*, July 1, 2001. 直接関係はないが、日本でNHKが行った世論調査の結果、7割が原爆投下日を正しく答えられなかったニュースが記憶に新しい。「NHK世論調査 原爆投下日を7割が不正解」NHKニュース、2015年8月3日。(資料11頁の記事も参照のこと。)

²¹ Dominion Institute / Ipsos-Reid Poll: 5th Canada History Quiz <<http://www.ipsos-na.com/news-polls/pressrelease.aspx?id=1255>>

²² Quoted in “Time to honour a national hero,” *A Globe and Mail Special*, Jan. 2002 <<http://v1.theglobeandmail.com/series/primeministers/pdf/turner-on-macdonald.pdf>>

²³ “Sir John A. Macdonald Day and the Sir Wilfrid Laurier Day Act” <<http://laws-lois.justice.gc.ca/eng/acts/S-10.4/page-1.html>>

²⁴ Sir John A. Macdonald High School (Upper Tantallon, NS), Sir John A. Macdonald Secondary School (Hamilton, ON), Sir John A. Macdonald School (G7-9, Calgary), Sir John A. Macdonald Collegiate (G9-12, Scarborough, ON)の4校。なお、カナダで大学名に名前を残すのは唯一ローリエのみである。

²⁵ “The Legacy,” Library and Archives Canada <<http://www.collectionscanada.gc.ca/sir-john-a-macdonald/023013-6000-e.html>>

超党派で提出された法案が国会審議されて、彼の誕生日である 1 月 11 日が国民の祝日と定められたのは、いま述べたとおり 2002 年であったが、早くからそれを提唱していたターナーの目には、それがあまりにも遅い決定と映った。そして、確かに遅かったに違いない。20 世紀末以降の歴史研究では、もはや英雄は存在できない。隣国でも、ワシントンでさえも、様々な批判の目に晒されているのである。

3. 二極化するマクドナルド評価とナショナル・ヒストリーの限界、そして可能性

3-1. 分裂するマクドナルド評

私たちの初代首相サー・ジョン・A・マクドナルド (Sir John A. Macdonald) が、実務的 (practical) な男と自称していたのはよく知られている。彼は冗談めかして自らを単なる「内閣製造人 (cabinet maker)」とさえ呼んでいた。彼は憲法上、政治上、あるいは法律上の高尚な理論をほとんど口にしなかった。その代わりに彼は、他の人々が哲学的に思索する傍らで、物事をやり遂げる男としての名声を深めていったのだ²⁶。

2015 年 1 月 9 日の「ナショナル・ポスト」紙には、カナダ現首相スティーヴン・ハーパー (Stephen Harper) の特別寄稿が掲載された。彼は、初代首相の言葉を額面通りに受け取る歴史家が多すぎると批判し、マクドナルドの視野の大きさや、連邦結成を可能にしたその理念を賞賛している。そして、「...もしも私たちがカナダ連邦の創設に彼が果たした役割を、理念を欠いた抜け目のない取り引き (horse-trading) のように扱うのなら、それは自分の国をみくびっていることになる」と主張する²⁷。これは、マクドナルドの伝記を書き上げたグィンの見方とも共通する。彼も、「(歴史研究の) 専門家の多くは、彼 (マクドナルド) を、チャーミングで頭が良く、シニカルで悪賢い指導者とみなして満足し、彼らの研究でカメオ的に登場させるが、それ以上のことはしない」と批判している²⁸。ハーパー首相はじめ国家アイデンティティを重んじる政治家、そしてピエール・バートン (Pierre Burton) からグィンへと至る歴史作家は、グラナッスティンら「ナショナル・ヒストリー」を提唱した歴史研究者とは話が合うに違いないが、それは歴史研究の主流ではなくなっている。

生誕 200 周年を迎えた今年、マクドナルドの評価は二極化の様相を強めている。2 年後の連邦結成 150 周年でも、彼を手放しに称賛するわけにはいかないだろう。それは、過去数十年間の歴史観の変化にも由来している。

この点について、200 周年記念マクドナルド演説集に共編者のアーサー・ミルンズ (Arthur Milnes, 周年行事大使、元ハーパー首相のスピーチライター) が寄せた文章が象徴的である。彼は、マクドナルドの重要性を強調しながらも、次のように述べる。

その時代の産物であったサー・ジョン・A は、完璧にはほど遠かった。本書ですでにカナダの歴代首相たちが記したように、初代首相の先住民や中国系カナダ人に関する演説を学ぶことで、私たち皆が過去の失敗から学び、より良い未来を創り出せるのである²⁹。

この序文に端的に表れているとおり、大酒飲みで金銭スキャンダルにもまみれたマクドナ

²⁶ “Stephen Harper reflects on Canada’s first prime minister, Sir John A. Macdonald,” *National Post*, January 9, 2015.

²⁷ *Ibid.*

²⁸ Richard Gwyn, “Afterward: Rediscovering Macdonald,” Dutil & Hall eds, *Macdonald at 200*, 440.

²⁹ Gibson & Milnes eds., *Canada Transformed*, xxix-xxx.

ルドは³⁰、今ではそれ以上に、少数派の差別によって強い批判に晒されている。

現代的な倫理観で違う時代の人物評価をするのは正しくない。少数派差別についても、彼はその時代において特別な存在だったわけではない。とはいえ、マクドナルドの当時の発言には先住民に対して差別的な表現が確かに多かった。また、西部に版図を拡大する際、大陸横断鉄道建設を急ぐマクドナルド政権は、先住民との「インディアン条約（第6条約）」で、飢餓に際しては食糧援助をする旨を約束していたにもかかわらず、それをせず、数千人単位の先住民の命を奪ったと糾弾されている³¹。

マクドナルドは、先住民の母語や文明を否定し、親元から引き離して英語・仏語と西洋文明の教育を施す寄宿学校の原型を作った首相としても批判される³²。「エドモントン・ジャーナル」紙の記事によれば、オンタリオ州ハミルトンでマクドナルド像の撤去を求める先住民団体の抗議運動が起きているのも道理で、彼らにとって初代首相は、大量虐殺の象徴なのである³³。

また、中国人移民は、大陸横断鉄道建設の安価な労働力として歓迎されたが、1885年に鉄道が完成すると、マクドナルド政府は掌を返して、彼らの入国を阻むべく人頭税を課すなどの施策をとった。たとえば選挙権についても、その年5月4日の下院で、マクドナルドは次のように述べている。

「インディアン」という語の後に「中国人の除外」という文言を挿入する提案をしたい。この修正について、長短いずれにせよ、議論の必要があるかどうか私にはわからない。中国人は、この土地の子供達であるインディアンとは異なる。彼らは外国からやってきた。そして人間として、カナダのどの部分にも定住するつもりはない。彼らはやってきて、働き、取り引きをして、それに飽きたら、利益を手を去ってしまうのだ。加えて、彼らは国を代表する諸機関がわからない場所から到来しており、彼らに安心して選挙権を与えることなどできない³⁴。

そのような判断が、当時のカナダではむしろ一般的だったとはいえ、時の首相の責任は重い³⁵。フランス系に対しては、「彼らを1つの国家として扱おう。そうすれば彼らは自由な人民が普通にするように寛容にふるまうだろう」と、妥協と寛容を示したマクドナルドも³⁶、他のマイノリティに対しては、全く違った振る舞い方しかできなかったのだ。

そしてケベックでも、フランス系の血を引くメイティの指導者ルイ・リエル (Louis Riel) の処刑後は、マクドナルドの評価にも陰りが見られた³⁷。論争を産む事件は首相評に直接影響する。しかし、国内で反乱を指導した人物に対して、他にどのような判断がありえた

³⁰ マクドナルドの飲酒については、いつも酒を飲み続けるアル中ではなく時に酒を過ごすタイプ (binge drinker) で、しかも 1876 年以降はそれを克服している点をマーティンは特に指摘している。Ged Martin, "Understanding Macdonald: Reviewing a Biographical Project," Dutil & Hall eds, *Macdonald at 200*, 424.

³¹ "Why Sir John A. doesn't deserve a celebration," *Times - Colonist*, January 7, 2015.

³² "A legacy not entirely golden: Sir John A. Macdonald's initiation of residential schools often overlooked," *Edmonton Journal*, February 20, 2015. (配布資料 11-12 頁参照)

³³ Ibid.

³⁴ House of Commons, *Debates*, May 4, 1885, quoted in Gibson & Milnes eds., *Canada Transformed*, 401-02.

³⁵ 付記すれば、同じ保守党のマシュー・ゴルト (Matthew Gault) 議員など、中国人にも、選挙権を与えるべきと反駁した議員もいた。しかしマクドナルドは、アーリア人種の優位を主張して、この主張を貫いたのである。そこには社会進化論の影響がはっきり見られる。Ibid.

³⁶ "Sir John A.'s vision of unity is complete," *The Globe and Mail*, January 13, 2015.

³⁷ "Love for Sir John A. didn't last in Quebec: After Riel's hanging, the Old Chieftain was not welcome," *Montreal Gazette*, January 13, 2015.

だろうか。その意味では、政治家の評価は、本人の資質と同等かそれ以上に世情の影響を受けるといえよう。

他にも、中央カナダ主導の連邦結成を沿海諸州や西部視点でどう評価するか、という議論もありえよう。連邦結成は、果たして東部沿岸諸州や西岸のブリティッシュ・コロンビア州にとっても最良の道だったのだろうか。誰の視点で歴史を描くのかによって、マクドナルドの評価は大きく変化するのだ。

3-2. マクドナルド--および政治家全般--の「再評価」に向けて

この生誕 200 周年の一環として、マクドナルドに関する 2 冊の研究書が出版されたのは、先に述べたとおりである。その 1 つ、*Canada Transformed: The Speeches of Sir John A. Macdonald* は、初代首相の様々な領域での演説を解説付きで抜粋している。その中には、前節で紹介した中国系に対する差別的発言なども含まれ、「公平性」に配慮した腐心の跡が見いだせる。多面的な発言を提示して読み手に評価を委ねる出版物は、現代的な「祝祭」にふさわしいのであろう。

他方、*Macdonald at 200: New Reflections and Legacies* は、様々な視点からマクドナルドの政策や思想を再考した、興味深い一冊である。婦人参政権、先住民、フェニアン、中国系、自由の概念といった個別テーマの論文からはじめ、経済に関する 3 論文、政治や政府に関する 4 論文を経て、「マクドナルドの記憶」と題したパート 4 を、イギリス人研究者の視点からマクドナルドを研究してきたジェド・マーティンの章を最後に据えて終え、歴史作家リチャード・グインの長いあとがき (Afterword) で結ぶ構成は、特に目を引く。結果として最後の 2 稿を外国人研究者と歴史作家に委ねているのだ。

そしてマーティンは、マクドナルドを国家の発展と重ねて実物以上に大きく見せようとしてきたドナルド・クレイトン (Donald Creighton) らの研究を批判する。マーティンによれば、連邦結成以前の政治家としてのマクドナルドは、必ずしも中心的存在ではなかった。「マクドナルドが連邦結成の電話ボックスから年老いた首領 (Old Chieftain) のスーパーヒーローの衣装を身にまとって登場した」のは神話にすぎず、彼に言わせれば、実際に重要な役割を果たした政治家の存在が矮小化されているのだ³⁸。

あとがきを任されたグインは、「マクドナルドなくしてカナダなし」の持論を展開する³⁹。彼も、初代首相の負の側面には触れつつも、その貢献の大きさを強調している。そして、先住民に対しても、女性と同様に参政権を付与しようとした時代の先駆者としての側面を指摘している⁴⁰。それは、マクドナルドを過度に英雄視するのに批判的なアカデミアの主流とは異なるアプローチながら、こちらも十分に説得的である。とはいえ、それを先住民やアジア系の視点で読んで同意できるかどうかは別の話であろう。

マクドナルド没後 200 周年の 2 冊は、1 つの「アカデミックな英雄伝」の制作は、不可能となったようにもみえる。はたしてそうだろうか。マーティンは、イギリスやアイルランドと比して、カナダに学者による伝記の伝統が不足していると指摘する⁴¹。おそらく求められるのは、伝記を書かないことではなく、問題点や異なる視点を踏まえつつ、それぞれの主題を明示した伝記が複数描かれることであろう。それによってマクドナルドとその

³⁸ その代表格としてマーティンは、ジョルジュ＝エチエンヌ・カルチエ (George-Étienne Cartier) やアレグザンダー・キャンベル (Alexander Campbell)、そしてサンドフィールド・マクドナルド (Sandfield Macdonald) らの名前を挙げる。Martin, "Understanding Macdonald," *Macdonald at 200*, 415-16. なお、Old Chieftain はマクドナルドの渾名の 1 つである。

³⁹ Gwyn, "Afterward: Rediscovering Macdonald," *Macdonald at 200*, 437.

⁴⁰ Ibid., 441-42.

⁴¹ Ibid., 413.

時代への理解が一層深まるに違いない。

むすびに代えて

かつて、グラナッスティンが1998年に刊行した『誰がカナダ史を殺したか？(Who Killed Canadian History?)』は、ナショナル・ヒストリーの復権を求める政治史家の叫びとしてカナダで話題を呼び、そして歴史研究者からの多くの反論を招いた⁴²。もはやナショナル・ヒストリーを描くことは、歴史研究者の主たる責務ではない。そのような時代になってようやく「国家のシンボル」としての評価が定着したのは、マクドナルドとその「シンパ」にとって不幸だった。

政治が権力による配分という面を持つ以上、万人から最高の評価を得られる政治家は、歴史上皆無である。また、それぞれが時代の思想や意識に影響されるため、現代の基準で過去の政治家の差別を弾劾するのも、適当ではない。世の中に無謬の人間など存在しないからである。我々がマクドナルドを評価する場合にも、時代性を差し引いた上で、国家に十分な貢献を果たしたのかを判断すべきである。

とはいえ、たとえばアジア系の我々が、中国系の参政権をめぐる議論に見られるアジア系への偏見を無視して、マクドナルドを論じることなどできないだろう。カナダの国家形成に重要な役割を果たしたマクドナルドの貢献を評価しつつ、しかし負の面にもしっかりと触れるアプローチを取るしかない。その意味で、生誕200周年を記念して編まれた2冊の文献は、伝記的アプローチの今後の方向性を示唆しているようにみえる。

ただし、断片化した歴史叙述では、もはやカナダの英雄像を生み出すことはできない。ナショナリズムの源となる「歴史小説」と、過去の人物像を多面的に理解しようとする「歴史研究」は、今後ますます乖離していくのかもしれない。日本人には日本的なマクドナルドの描き方もあるに違いない。カナダでも、日本を含む諸外国でも、それぞれの視点・視角から様々なマクドナルド伝が描かれることが期待される。そのような多様な叙述こそが、21世紀的な評伝の方法となるはずである。

追) 本報告の準備過程で、研究ノート「カナダ初代首相ジョン・A・マクドナルド生誕200周年：彼の功績と評価をめぐって」を執筆し、『麗澤レビュー』21巻(2015年6月)に掲載した。本報告の以上の説明には、この研究ノートと重複する内容が少なからずあることをお断りしておきたい。

主要参考文献・サイト

1. 邦語書籍

- ・木村和男『連邦結成—カナダの試練』日本放送出版協会、1991年。
- ・ _____編『カナダ史』山川出版社、1999年。
- ・津田博司『戦争の記憶とイギリス帝国：オーストラリア、カナダにおける植民地ナショナリズム』刀水書房、2012年。
- ・細川道久『カナダの自立と北大西洋世界：英米関係と民族問題』刀水書房、2014年。

2. 邦語論文

- ・大原祐子「カナダにおける『ナショナル・ポリシー』の決定とジョン・A・マクドナルド」『史苑』112号、1973年。

3. 英語書籍

- ・Creighton, Donald, *John A. Macdonald: A Young Lion* (Toronto: University of Toronto Press, 1952).

⁴² Granatstein, *Who Killed Canadian History?* (Toronto: Harper Collins Publisher Ltd., 1998). この書をめぐり議論については、かつて筆者は1999年2月6日に東京カナダ研究会(於明治大学)で、「J・L・グラナッスティンのリビジョニズムとカナダ政治史における時代区分」と題して報告した。社会史家から総攻撃を浴びた本書は、歴史学の潮流を引き戻す力とはならなかったのである。

- _____, *John A. Macdonald: An Old Chieftain* (Toronto: University of Toronto Press, 1955).
 - Donaldson, Gordon, *The Prime Ministers of Canada* (Toronto: The Doubleday Canada Limited, 1994).
 - Dutil, Patrice, & Roger Hall eds, *Macdonald at 200: New Reflections and Legacies*, (Toronto: Dundurn), 2014.
 - Gibson, Sarah Katherine, & Arthur Milnes eds., *Canada Transformed: The Speeches of Sir John A. Macdonald—A Bicentennial Celebration* (Toronto: McClelland & Stewart, 2014).
 - Granatstein, J.L., *Who Killed Canadian History?* (Toronto: Harper Collins Publisher Ltd., 1998).
 - _____ and Norman Hillmer, *Prime Ministers: Ranking Canada's Leaders*, (Toronto: A Phyllis Bruce book, 1999).
 - Gwyn, Richard, *John A.: The Man Who Made Us, Vol. 1: 1815-1867* (Toronto: Random House Canada, 2008).
 - _____, *Nation Maker—Sir John A. Macdonald: His Life, Our Times, Vol. 2-1867-1891* (Toronto: Random House Canada, 2012).
 - Martin, Ged, *John A. Macdonald: Canada's First Prime Minister* (Toronto: Dundurn, 2013).
 - Phenix, Patricia, *Private Demons: The Tragic Personal Life of John A. Macdonald* (Toronto: McClelland & Stewart, 2006).
 - Pope, Joseph, *Memoirs of the Right Honourable Sir John Alexander Macdonald, G.C.B.*, 2vols., (Ottawa: J. Durie & Son, 1894).
 - Pope, Maurice, ed., *Public Servant: The Memoirs of Sir Joseph Pope*, (Toronto: Oxford University Press, 1960).
4. 英語論文
- Wood, Patricia K., “Defining ‘Canadian’: Anti-Americanism and Identity in Sir John A. Macdonald’s Nationalism,” *Journal of Canadian Studies*, 36(2), Summer 2001.
 - Pelletier, Yves Y., “The Old Chieftain’s New Image: Shaping the Public Memory of Sir John A. Macdonald in Ontario and Quebec, 1891-1967” (Ph.D Thesis, Queen’s University, 2010).
5. 新聞記事 (主要なもののみ)
- “A legacy not entirely golden: Sir John A. Macdonald’s initiation of residential schools often overlooked,” *Edmonton Journal*, February 20, 2015.
 - “Everyone knows John A. Macdonald was a bit of a drunk, but it’s largely forgotten how hard he hit the bottle,” Hopper, Tritstin, *National Post*, January 9, 2015.
 - “Love for Sir John A. didn’t last in Quebec: After Riel’s hanging, the Old Chieftain was not welcome,” *Montreal Gazette*, January 13, 2015.
 - “Sir John A. Macdonald--an underrated statesman,” *The Ottawa Citizen*, January 3, 2015.
 - “Sir John A.’s vision of unity is complete,” *The Globe and Mail*, January 13, 2015.
 - “Stephen Harper reflects on Canada’s first prime minister, Sir John A. Macdonald,” *National Post*, January 9, 2015.
 - “Time to Honor Our National Hero,” *The Globe and Mail*, January 12, 2002 <<http://www.theglobeandmail.com/globe-debate/time-to-honour-a-national-hero/article752460/>>
 - “Why Sir John A. doesn’t deserve a celebration,” *Times – Colonist*, January 7, 2015.
6. サイト
- “Archived--Sir John A. Macdonald: Canada’s Patriot Statesman,” Library and Archives of Canada <<http://www.collectionscanada.gc.ca/sir-john-a-macdonald/index-e.html>>
 - “Events Mark Sir John A. Macdonald Bicentennial,” City of Kingston site, <<https://www.cityofkingston.ca/-/events-mark-sir-john-a-macdonald-bicentennial>>
 - Ipsos.com <<http://www.ipsos-na.com/news-polls/pressrelease.aspx?id=6617>>
 - “Macdonald, Sir John Alexander,” *Dictionary of Canadian Biography* <<http://www.collectionscanada.gc.ca/sir-john-a-macdonald/index-e.html>>
 - “Pacific Scandal,” *The Canadian Encyclopedia* <<http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/pacific-scandal/>>
 - “Sir John A. Macdonald Day and the Sir Wilfrid Laurier Day Act,” <<http://laws-lois.justice.gc.ca/eng/acts/S-10.4/page-1.html>>
 - Sir John A. 2015 <www.sirjohna2015.ca>
 - 「カナダ：先住民族にとって暗い初代首相の遺産」IPS JAPAN <<http://www.ips-japan.net/index.php/region/north-america/2042-canadas-first-pm-hardly-hero-first-nations-2>>

【補遺】 マクドナルド生誕200周年に関連する記事 2本

Sir John A. Who?: Learning aboriginal history is a good idea. Learning Canadian history is even better

National Post, 23 Feb 2015

The students' association at the University of Winnipeg has proposed that all undergraduates take a mandatory course on aboriginal history. Association president Rorie McLeod-Arnould said greater knowledge of native history, culture and experiences would foster "meaningful reconciliation between indigenous peoples and the broader Canadian community."

It is never bad to learn about the experiences of others, and Canadians could certainly benefit from greater understanding of the cultures that occupied the land for centuries before interruption by largescale European immigration. Lack of familiarity with history is hardly an issue troubling native communities alone, however. Poll after poll demonstrates Canadians have only the vaguest understanding of their own history.

A survey conducted in January - the month of Sir John A. Macdonald's 200th birthday - found one in four Canadians could not identify him as the country's first prime minister. Twenty-eight per cent couldn't identify the year of Confederation, and 44 per cent didn't know Canada turns 150 years old in 2017. An earlier poll found Canadians are an increasingly proud and patriotic lot, but are unnervingly vague when it comes to such details as the words of the national anthem.

It's not hard to pinpoint why. History studies in Canadian schools are a mishmash of facts and figures that vary from curriculum to curriculum and province to province. It is possible to make it all the way to university having been protected from all but the most fleeting exposure to Canada's birth and development. A few words on the fur trade, some casualty figures from Ypres or Vimy, a prime minister or two and you're done. Young people know they like Canada, they just don't know much about it.

So while we will reserve judgment on the need for mandatory courses on aboriginal culture, we can enthusiastically endorse greater exposure of Canadian students to Canada. It's about us, after all. What could be more interesting?

A legacy not entirely golden; Sir John A. Macdonald's initiation of residential schools often overlooked

Heather Conn, *Edmonton Journal*, 20 Feb 2015

The recent bicentennial celebrations of Sir John A. Macdonald's birth have left me flinching in a family conflict kind of way. Part of me feels proud to be related on my mother's side to the so-called "Father of Canada." I am fond of an heirloom circular table, which he once used, that sits in the corner of my home office.

However, when I gaze at his sombre face on our current stamps, another part of me feels embarrassed. His Canada Post portrait reminds me that I share the same blood as someone whom our history books should more rightly call "father of residential schools."

Centuries of official accounts in this country have ignored Macdonald's role in initiating and approving the forced assimilation of aboriginal children, which launched Canada's residential school system.

A new, thoroughly researched hardcover book, which I edited, aims to correct the popular image of this crusty politician, my ancestor, and expand our vision of Canadian history.

In *Residential Schools: With the Words and Images of Survivors* (Indigenous Education Press and Shingwauk Residential Schools Centre 2014), residential school survivor and award-winning author Larry Loyie challenges our widely accepted version of how Macdonald shaped this nation. Under the heading "John A. Macdonald: Friend or Foe?" he and co-authors Constance Brissenden and Wayne K.

Spear write: "His dream of a nation stretching from sea to sea had one major obstacle ... Aboriginal people were in the way."

Our first prime minister and his Canadian government gained complete control over the nation's aboriginal people, thanks to the British North America Act of 1867 and the Indian Act of 1876.

But the reserve system, which put aboriginals under strict government control in designated areas, was not enough to reassure early would-be settlers that it was safe to put down roots in Canada's undeveloped west. Macdonald reasoned that aboriginals needed to adjust their beliefs and behaviours to the European way of life, starting in childhood.

Hence, he endorsed the forced assimilation of aboriginal children, initiating the system of "Indian" boarding schools. This policy was identified as "aggressive civilization" in an 1879 report to the Canadian government.

The first official residential schools in Canada opened in 1892, a year after Macdonald ended his final term in office. But the model was The Mohawk Indian Industrial School, also known as the Mohawk Institute in Brantford, Ont., opened in 1828, financed by a Protestant missionary society. With a former British army officer in charge, the school took in boarders from the Six Nations Reserve in 1831. Children as young as five received strict army-style training.

Macdonald endorsed this military model of assimilation. Under his legacy, more than 150,000 aboriginal children attended an estimated 144 residential schools from the late 1800s to as late as 1996. They suffered verbal, physical, emotional and psychological abuse at many of these schools.

The co-authors of *Residential Schools* are determined to put Macdonald's role within a truer, broader framework. They hope that their book, identified on the cover as "A National History," will be used as a textbook across Canada. As a whole, it provides a coast-to-coast look at the long-term impact of colonization and assimilation policies on aboriginal culture and traditions.

I'm not surprised that aboriginal-rights advocates recently demanded the removal of Macdonald's statue in Hamilton; to our nation's aboriginals, he is a symbol of genocide. About two dozen people staged a protest Jan. 11 in front of the statue, disrupting a local society's celebration of Macdonald's bicentennial birthday.

Just as Columbus Day in the U.S. ignores aboriginal culture and presence by celebrating European colonization, Canada's official bicentennial celebrations for Macdonald's birthday disregarded more than a century of abusive treatment launched by our first prime minister's policies.

"The hidden history of residential schools must be known to ensure the human rights of all Canadian children," says Loyie.

It is vital that in the telling of history, whether it's of a nation or a family, we are honest about the influence, in all its forms, of a prominent figure. Otherwise, we present only a whitewashed version of the past, which does a disservice to us all.

Heather Conn, MFA, is an author of two history books and a former oral historian. A history graduate from the University of British Columbia, she works as a freelance writer, editor, writing coach, and communications consultant.

Credit: Heather Conn; *Edmonton Journal*

Supplied / The co-authors of *Residential Schools* want to put Sir John A. Macdonald's role in forced assimilation and the institution of residential schools within a truer, broader framework, writes Heather Conn.